

平成26年6月27日

『日本国民の誓文』（案）

I 起草の態度（国民典範とは）

- 1 『神勅』及び『神武建国の詔』に基づく『国民典範（仮称）』を創る。
- 2 皇孫以外に授けられた『神勅』や、『神武建国の詔』に示された国民の使命・役割を描き出す。
- 3 天皇と一体としての国民の在り方を示す。（『皇室典範』との連携）
- 4 神武建国以来、未来永劫、日本国民の精神及び行動規範となり、社会の基本的価値通念となるものにする。
- 5 『基本法（憲法）』の思想的背景となるもの。（『基本法（憲法）』との連携）

II 起草にあたり留意すること

- 1 使用する用語や表現は、17条憲法、教育勅語など御歴代の詔勅等で示された国民の道德倫理規範等の重要な言葉を適用する。
- 2 神勅及び御歴代天皇以外の人物の文章・言葉は、あくまで参考にとどめ、直接的な引用は避ける。
- 3 日本国民の自発的宣命の言葉としてあらわす。
（強制や契約的性質は排除する）
- 4 国民夫々が主体的に行動していくために、日本人としての「立ち位置」を明確に表す。日本人とは何もので、どこから来て、どこへ向かおうとしているのか。
- 5 日本国民であることに、誇りと自信と勇気を持てるものにする。
- 6 誰もが容易に理解し口ずさむような、平易で美しい言葉とする。古語を含む伝統的な日本語で表現され、カタカナ日本語は勿論のこと翻訳日本語も出来るだけ使用さける。
- 7 日本伝統の道德倫理観を、世界の人々にも共鳴できる道理として表す。また、今、世界で起きている問題の解決を予想させ、期待感、安堵感を世界の人々に抱かせるものに。その為にも他国民を誹謗中傷、拒絶排斥することなく、それぞれの国土、文化、歴史、伝統、宗教の独自性を尊重していること自然に感じられるものに。人の不幸、他国の犠牲の上に成り立つ幸福はない。

III 「神勅」・「詔」等々

■高皇産靈尊 おほなむちのかみ 大己貴神に下されし八カ條の神勅

「夫れ汝が治す顕露の事は、宜しく是れ吾孫治すべし。汝は則ち以て神の事を治すべし。又汝の住むべき天日隅宮は、今当に供造りまつらむ。即ち千尋の栲縄を以て結ひて百八十 粉 にせむ。其の宮を造る制は、柱は即ち高く太く、板は即ち広く厚くせむ。又田供佃らむ。又汝が往来ひて海に遊ぶ其えの為に、高橋、浮橋、及び天鳥船も亦供造らむ。又天安河にも亦打橋造らむ。又百八十縫の白楯供造らむ。又汝が祭祀を主らむ者は、天穗日命是なり。」

■高皇産靈尊 大物主神に下されし皇孫奉護の神勅

「汝若し国神を以て妻とせば、吾猶ほ汝を疏き心ありと謂はむ。故れ今吾が女三穗津姫を以て、汝に配せて妻とせむ。宜しく八十万の神を領ゐて、永に皇孫の為に護り奉れ。」

■高皇産靈尊 ひもろぎいわさか 神籬磐境の神勅

「吾は則ち天津神籬及天津磐境を起樹てて、当に吾孫の為に斎ひ奉らむ。汝天兒屋命・太玉命、宜しく天津神籬を持ちて、葦原の中国に降りて、亦吾孫の為に斎ひ奉れ。」

■天照大神 殿内防護の神勅

「惟はくば汝二柱神、亦同じく殿の内に侍ひて、善く防ぎ護ることを為せ。」

■天照大神 思金神に下されし皇政扶翼の神勅（取持前事爲政）

「思金神は、前の事を取り持ちて、政 為よ。」

■文武天皇 即位の宣命(元年八月十七日)

現神と大八嶋國所知す天皇が大命らまと詔りたまふ大命を、集侍はれる皇子等・王・臣・百官人等・天下公民・諸聞食さへと詔る。高天原に事始めて、遠天皇祖の御世御世より中今に至るまでに、天皇が御子のあれ坐さむ彌繼々に、大八嶋將知次と、天つ神の御子随も、天に坐す神の依さし奉りし随に、聞看來る此天津日嗣多高御座の業と、現御神と大八嶋所知す倭根子天皇命の、授賜ひ負賜ふ貴き高き廣き厚き大命を受賜はり恐み坐して、此の食國天下を調賜ひ平賜ひ、天下の公民を惠賜ひ撫賜はむとなも、隨神所思行さくと詔りたまふ天皇が大命を、諸聞食さへと詔る。是を以て

もものつかさのひとども　よものをすくに　おさめまつ　まけたま　くにぐに　みこともちたち　すめら
百官人等、四方食國を治奉れと任賜へる國國の宰等に至るまでに、天皇
が朝庭の敷賜ひ行賜へる國法を過ち犯す事無く、明き淨き直き誠の心以て、
御稱み稱みて緩怠る事無く、務結りて仕奉れと詔りたまふ大命を、諸
聞食さへと詔る。故れ如此の狀を聞食し悟りて、欸しく將仕奉人は、其の仕奉
れらむ狀の隨に、品品讃賜ひ上賜ひ、治將賜物ぞと詔りたまふ天皇が大命を、
諸聞食さへと詔る。（「續日本紀」一）

IV 『国民典範（仮称）』の草案内容の考え方

1 前 文（国の成り立ち、君民一体の国がら）

私たち日本国民は、記紀に記された日本神話を起源として、我々の祖先が、世々の歴史を通じ尊いものとして伝えてきた美德を、正しく理解し、それを国の内外において実践し、また、末永く子孫へと伝えていきたいと思う。

この伝統の美德は、いつの世も、天津日繼高座におわします皇孫たる天皇陛下が国民に御示しになってきたもので、日本の歴史を築いてきた我々祖先の遺風の中に伝統文化慣習として生きているものである。

私たち日本国民は、その美德の継承者たることを自覚し、天皇陛下と共に夫々の立場で日々実践し、心をつにして国家と世界の発展に力を尽くしたいと願う。

解説①：君民一体とは、天皇と臣民との没我帰一の関係。君主と人民のように相対立する関係ではなく、天皇と臣民は、義は君臣にして情は父子であり、我が国は天皇を古今に亘る中心と仰ぐ一大家族国家である。生み生まれるという自然の関係を本とし、臣民は祖先に対する敬慕の情を以って宗家たる皇室を崇敬し、天皇は臣民を赤子として愛しむ。君臣の関係は公であり、義によって結ばれるが、「おほやけ」は大家、国すなわち家を意味している。

文部省編纂「国体の本義」（昭和 12 年）を編集

2 国 民とは（皇室典範に呼応させる）

私たち日本国民は、天皇陛下のしろしめす大御心にこたえ、その美德を自らの心として養い、それを実践し広く社会に広めようとする民である。

神武天皇は、建国にあたり、天の下皆が共に助け合う家族のように暮らす国家を創らんと『八紘為宇』を国民に呼びかけられた。畏くも、代々の天皇陛下は、国民を「おおみたから」とおよびになられ、君民心をつにして『八紘為宇』を日々実践することをこい願われた。

私たち日本国民は、その大御心におこたえし、天の下何人も平等であり真心と節度を保ち相互尊重をしつつ、建国の理想である『八紘為宇』の壮大なる理想実現に参画することを誇りとするものである。

解説②：八紘一宇とは、世界が一家族の如く睦み合うこと。一宇、即ち一家の秩序は一番強い家長が弱い家族を搾取するのではない。一番強いものが弱いもののために働いてやる制度が家である。これは国際秩序の根本原理を御示しになったものであろうか。現在までの国際秩序は弱肉強食である。強い国が弱い国を搾取する。力によって無理を通す。強い国はびこって弱い民族をしいたげている。世界中で一番強い国が、弱い国、弱い民族のために働いてやる制度が出来た時、初めて世界は平和になる。日本が一番強くなって、そして天地の万物を生じた心に合一し、弱い民族のために働いてやらねばならぬぞと仰せられたのであろう。

清水芳太郎著「建国」（昭和13年）を一部編集

3 国民の美德（性質）

（1）和する心（平時に社会として大切にしてきた価値観、宇宙観、自然観、時間軸としての「柱」）

私たち日本国民は、森羅万象が神（自然）から産み成された神聖なる霊を宿しており、過去から未来そして今在る総てのものが相互に結ばれていることを自覚し、夫々が、その本来の神聖なる自性を発揮することにつとめる。

この本来の自性を曇らす、まが事や罪穢れは、他者や自然を犠牲にしてまで自己の欲心を果たそうとする思想や行為から顕れる。（人の不幸の上に成り立つ幸福はない。）

自然や他の人々に感謝し相互に思いやる心は、我々の美德である。私たち日本国民は、自己の成長と幸福は自然と社会の健全なる営みよってもたされることを自覚し、自然と社会にたいする感謝の気持ちを忘れない。

その感謝の心は、今を共に生きる人々や自然のみならず（自然に親しみ人々と睦み四海同胞を旨とする）、我々を生み育ててくれた祖先や永遠の時を刻む自然にたいしても捧げられるものである（神を敬い祖先を崇める）。

私たち日本国民は、宇宙創成から永遠と続く自然と、祖先の御魂と、総ての人々と大きく和して生きることを喜びとする。

（2）大和魂（生まれ持った個人の性質一特に有事に必要とされる）

清らかで明るく正しく素直な心を大事に保守する猛々しい大和魂は、私たち日本国民の美德である。

私たち日本国民は、自己の犠牲もいとわぬ気高く猛々しい大和魂をもって、まが事や罪穢れを禊祓い清め、人々が清らかで明るく正しく素直な心で生きる社会を保守することを誇りとする。

4 国民の活動（理想の社会の実現に向けて何を為すかの具体化、社会をつなぐ「橋」）

私たち日本国民は、日々建国の理想である『八紘為宇』を実践し、国家と世界が共に助け合う家族のように暮らせる世の実現のため働く。

私たち日本国民は、例え微力であっても、一人ひとりの努力と働きが、自然と国家そして世界の成長と発展に寄与することを自覚し、すすんで世のため人のため力を尽くすことに誇りを持つ。

私たち日本国民は、天皇陛下と国民が一体となって、共に理想の社会の実現を図ろうと、日々怠らず、世のため人のために力を尽くすことで、より良い国家を創造する。

私たち日本国民は、すすんで世界の人々とも心をひとつにして力を合わせ、『八紘為宇』の理想を広く世界の人々と共有し、世界の人々が共に助け合う家族のように生きていけるよう協力することで、よりよい世界を創ることに貢献できることを信ずる。

国民典範（仮称）

（現代語⇒古語への変換必要）

序文

私たち日本国民は、記紀に記された日本神話を起源として、我々の祖先が、世々の歴史を通じ尊いものとして伝えてきた美徳を、天皇陛下と共に夫々の立場で日々実践し、心を一つにして国家と世界の発展に力を尽くしたいと願う。

1 国民とは

私たち日本国民は、天皇陛下のしろしめす大御心にこたえ、その美徳を自らの心として養い、それを実践し広く社会に広めようとする民であり、建国の理想である『八紘為宇』の壮大なる理想実現に参画することを誇りとするものである。

2 国民の美徳

（1）和する心

私たち日本国民は、万有万象が天地の初めから一体となって産み成され、連綿としてムスビ繋がる神聖なる霊を宿しており、今在る総てのものが過去から未来へと相互に結ばれていることを自覚し、各々が、その本来の神聖なる自性を発揮することにつとめる。そして、宇宙創成から永遠と続く自然と、祖先の御魂と、総ての人々と大きく和して生きることが喜びとする。

（2）大和魂

私たち日本国民は、世のため人のため自己の犠牲もいとわない気高く猛々しい大和魂をもって、まが事や罪穢れを禊祓い清め、人々が清らかで明るく正しく素直な心で生きる社会を保守することを誇りとする。

3 国民の活動

私たち日本国民は、すすんで世界の人々とも心をひとつにして力を合わせ、『八紘為宇』の理想を広く世界の人々と共有し、世界の人々が共に助け合う家族のように生きていけるよう協力することで、よりよい世界を創ることに貢献できることを信ずる。